

シンポジウム 1：学生時代から行う国際交流の意義

5. 学生を主とした国際交流からの学び

眞鍋 紀子*

[Key Words] 国際交流経験、積極性、知恵、発想の転換

はじめに

本学は臨床検査学科と看護学科の2学科からなる県立大学であり、国際交流は平成26年にスタートし、現在4大学との交流がある。4大学は、ピントゥアン医科大学(ベトナム)、ロッキーズ大学(カナダ)、南アルバーター工科大学(カナダ)、ベッドフォードシャー大学(イギリス)である。国際交流委員会を中心にはじめた手探り状態での国際交流ではあるが、学生が関わったロッキーズ大学と南アルバーター工科大学との短期留学と交換留学について報告し、交流のあった学生のアンケート等から、学生を主とした国際交流からの学びについて考えてみたい。

I. ロッキーズ大学：College of the Rockies：

COTR と南アルバーター工科大学：

Southern Alberta Institute of Technology：

SAIT との国際交流について

1. COTR は、カナダ・ブリティッシュコロンビア州南部のクランブルック市にあり、カナダ人学生3,000人と世界30カ国以上からの留学生が180人程度在籍し、多種文化が交じりあったグローバル環境の短期大学である。COTRには看護科と英語科があり、本学教員2名がCOTRに出向き、交

流について話し合いをしたが、看護科が改修工事中であったため、看護科への受入れはできなかった。COTRは、本学にELT(English Language Program)とホームステイプログラムを準備し、英語科への短期留学が可能となった。

2. SAITは、カナダ・アルバーター州の南部カルガリー市にある総合技術学校で、テクノロジーやビジネスで100を超える職業プログラムを提供している。SAITには、8つのスクールがあり、Medical Laboratory Technology (MLT)のプログラムは、School of Health and Public Safetyというスクールの中にある。このスクールだけで、スタッフ数は215名、学生数は5,000名という巨大な総合技術学校である。SAITから国際交流コーディネーターの訪問があり、本学の教員もSAITを視察訪問し、平成27年6月に交換留学協定を締結した。

II. COTR への短期留学について

(March 12-22, 2016)

1. 参加者およびスケジュール

本学学生(看護科1学年)3名、教員(看護科教員)1名が自費参加した。

宿泊はホームステイで、ホストファミリーが、空港送り迎え、食事3食(ランチ込)、Day Tripも

*香川県立保健医療大学保健医療学部臨床検査学科 manabe5@chs.pref.kagawa.jp

行うシステムが組まれていた。COTR での短期プログラムは、朝 9:20 スタート、15:10 でフィニッシュというスケジュールで、英語学習、討論会、課題学習、ホームワークなどを多国籍クラスメートとこなすという学習体験であり、特別に看護科の施設見学も可能となった。

2. 留学費用

全額自費参加であるが、同窓会から学生参加に一割程度の援助があった。ホームステイ込み料金

であるため、観光等も含まれているが、ホストファミリーにより、内容にはかなり違いがあった。

III. SAIT からの留学生の受入れについて

1. 2015 年の留学受け入れ (June 28-July 10, 2015)

2015 年の受け入れは、「MLT 学生 5 名と MLT 教員 1 名：引率者」であったため、臨床検査学科が対応した。我々は、SAIT の学生用に 2 週間のプログラムを作成して対応した(表)。3 学年は、ほ

表 SAIT 学生受け入れスケジュール(2015)

SAIT at KPUHS: Schedule at a Glance (June 28- July 10, 2015)

As of 2015/06/26

6/28 (Sun)	6/29 (Mon)	6/30 (Tue)	7/1 (Wed)	7/2 (Thu)	7/3 (Fri)	7/4 (Sat)
	A.M. ①Introduction to local area (Hirakawa) ②Introduction, orientation and tour of KPUHS labs and facilities (Hirakawa, Janjua) ③Welcome ceremony (Janjua)	① Day trip to Konpira shrine (Tokuhara, Yamaguchi) ②Walking around KAWARAMACHI (Tokuhara)	A.M. Clinical Genetic Testing Practice (Ueno)	A.M. Microbiology Research, special course (Okuda)	A.M. Pathological Technology Practice (Hirakawa)	Sightseeing in Hiroshima
P.M. (21:20) Arrival in Takamatsu (Hirakawa, Janjua, Uemura)	P.M. ①Hematological Technology Practice & self-introduction (Manabe) ②14:40- Medical English III (Janjua)		P.M. Tour of TAKAMATSU Red Cross hospital (Tada, Tokuhara, Uemura)	P.M. Bio sample Analytical Technology Practice (Tada)	P.M. Departure for Hiroshima (7/3, 4) & Kyoto(7/4, 5)	Travel to Kyoto
	after school	after school Welcome party (Ohta)	Special Lecture (Donnell Wolff) Time with KPUHS students	after school	Overnight Stay in Hiroshima	Overnight stay in Kyoto
7/5 (Sun)	7/6 (Mon)	7/7 (Tue)	7/8 (Wed)	7/9 (Thu)	7/10 (FRI)	
Sightseeing in Kyoto	A.M. Lecture on Medical Laboratory Technology in Japan (Himoto)	A.M. Physiological Technology Practice (Imai)	A.M. Walk on the Shikoku 88 temple pilgrimage route	A.M. (11:00-14:00) Lunch at Yamadaya and trip to Yashima (Yukimasa, Uemura)	A.M. Free time (Ask for suggestions)	
Return to Takamatsu	P.M. Trip to Ritsurin Garden (Himoto, Uemura)	P.M. Transfusion and Trans-plantation Immunology Practice (Yukimasa)	P.M. Tour of Kagawa Pref. Central Hosp., Kagawa Univ. Hp. (Tateishi, Janjua, Uemura)	P.M. (15:00-15:30) Farewell ceremony (Janjua)	P.M. 13:00-14:30 Liberal Arts & Sciences Seminar (Janjua)	
Back at the Ryokan in Shido	after school	after school Tea ceremony club (16:20-) (Manabe)	after school	after school Farewell party With KPUHS students and teachers (Ohboshi, Ohta, Suezawa)	after school (19:35) Departure for Tokyo (Hirakawa, Janjua, Uemura)	

とんどの実習を共に行った。2学年は、書道、折り紙、料理(日本食)体験の企画を行い、実行した。また茶道部の学生が茶道体験を、さらに学生主動の Farewell Party が計画された。教員は、実習対応、施設見学、観光地案内等の対応を行った。

2. 2016年の留学受け入れ(July 3-15, 2016)

2016年の受け入れは、「MLT 学生1名、RT (Respiratory Therapy) 学生1名と MLT 教員1名：引率者」であったため、国際交流委員会を中心に昨年と同様な2週間のプログラムを作成し、各学科で行うもの、共通で行うものに分けて、臨床検査学科と看護学科で対応した。学生の企画は、昨年のイベントに加えて、七夕飾りや連想ゲーム等が加わった(図1)。教員は、昨年の対応のほかに、日本文化の体験ができるような案内等(鎧兜・十二単着付け体験)を行った。

3. 宿泊施設

宿泊施設は、大学近隣の安価な和風旅館で、教職員の車送迎だけでなく、電車利用と徒歩で通学可能な施設を準備した。

4. 留学費用および受け入れ費用について

SAIT の学生は援助付自費参加である。本学の受け入れ費用は、同窓会からの援助(学内行事等)のみで行った。

IV. SAIT への短期留学について

1. 2015年の短期留学(September 2-28, 2015)

2015年の留学は「学生2名(看護科1学年)と教

員1名(国際交流委員長：引率者)」であり、大学内の LABO (Respiratory Therapy, Ultrasound, Cardio-pulmonary patient assessment, Medical technology) の見学や Lecture, 観光地への案内、カーリングクラブの見学や学生が作るディナーの接待等のプログラムが組まれていた。

2. 2016年の短期留学(September 11-24, 2016)

2016年の留学は「学生2名(臨床検査学科・看護科2学年)と教員1名(臨床検査学科)：引率者」であり、昨年同様のきめ細かなプログラムが組まれていた(図2)。

3. 宿泊施設

宿泊施設は、大学推薦の近隣のホテルであり、SAIT まで電車通学可能な施設が準備されていた。

4. 留学費用および受け入れ費用について

全額自費参加であるが、同窓会から学生参加に一割程度の援助があった。受け入れの SAIT 側のプログラムには、カナディアンロッキー観光等が含まれていた。

V. 国際交流を終えた学生の声 (報告会・アンケートから)

1. COTR へ行った留学生から

① 発音、ネーティブの英語を理解すること、② 長文を読むこと、③ 意志を明確に伝えること、これらの大切さを再確認し、英語の勉強法が変わったと報告があった。



A : 免疫検査学実習(2016)



B : 折り紙体験(2015)

図1 SAIT 受入れ時の写真から



A : 採血体験(2015)



B : カーリング体験(2016)

図2 SAIT 短期留学生の写真から

2. SAIT へ行った留学生から

① SAIT の学生の講義での積極性や活発な討論、
② SAIT の学生の真剣な学びの姿勢、これらに感動し、勉強への取り組み方を学んだと報告があった。

3. SAIT 学生を受け入れた本学学生から

① SAIT の学生は実習内容の理解度が高い、② カナダの手技力の高さに驚いた、③ つたない英語も通じると楽しい、④ 英語は大事だ、⑤ 世界観が変わった、という報告や感想があった。

VI. 臨床検査学科学生における

「中学・高校時代の国際交流経験率」、
「SAIT への短期留学の興味」、
「興味があるが行けない理由」について

平成 28 年 6 月に臨床検査学科学生(1~4 学年: 73 名)から、中学・高校時代の国際交流体験と SAIT への短期留学への興味についてのアンケート結果を得た。中・高校時代に何らかの国際交流の経験があった学生は全体の 30%であり、彼らの 72.3%は SAIT への短期留学に興味を持っていた。しかし経験のなかった学生 70%のうち、短期留学に興味を持った学生は 39.2%であり、経験の有無で明らかに差が見られた($p < 0.01$) (図 3)。中・高時代の国際交流内容は、① 留学生が来て一緒に授

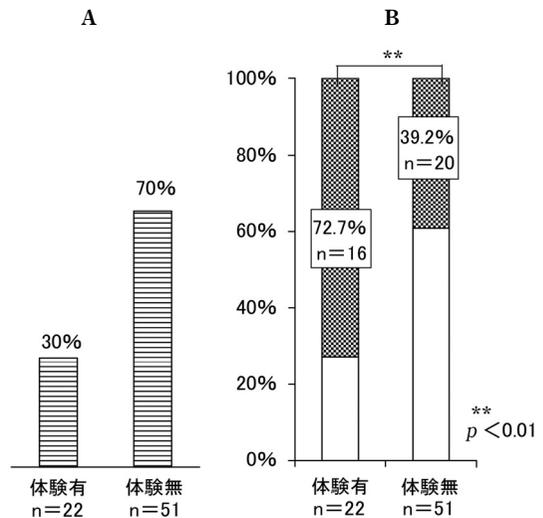


図 3

A : 臨床検査学科学生の高校・中学時代の国際交流体験率
B : SAIT への短期留学の興味 (A の体験有・体験無別)

業を受けた、② 修学旅行で海外に行き、相手国の高校生との英語交流と課題研究の発表をした、③ ホームステイをした、④ アイパル香川(国際交流協会)の行事に参加した、などであった。

短期留学に興味があるが、行けないと回答した理由としては、① 留学費用の問題、② 治安の問題、③ 臨地実習・就職・進学が気になる、④ 英語力に

不安がある、であった。またカナダは比較的安全な国ではあると思われるが、近年の海外での事件などから、両親からストップがかかった学生もいた。

VII. まとめと今後の課題

早期の国際交流経験は、国際的な興味を高め、積極性を生むと考えられた。

また、国際社会での英語力の自覚(実体験)が、新しい学習法が必要だという考え(知恵)を生んだと思われた。さらに、教育・文化の違いを知ることと感動体験が、発想の転換の引き金になるのではないかと感じられた。

小規模大学(国際交流センター等がない大学)での教員でも、学生が世界に目を向け行動を起こせ

るためにできること…それが今後の課題である。

現在考えていることは、近隣国(旅費安価)との国際交流、英語教育の工夫、国際交流の単位化、余裕あるシラバス、そして今年度から本学に新設したクラブ活動(セカンド・ハンド・ユース)などであるが、他にも探索していきたい。

おわりに

手探り状態でスタートした国際交流、忙しさ故の教員の不満、しかし生き生きとしている学生達、そんな中で、ほとんどの教員が今後の国際交流の存続に賛成した。それが本学臨床検査学科の現状である。知識だけでは動きだせない。しかし、知識と経験から得るものは果てしなく大きいと今更ながら実感している私である。